

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號五第 卷十五第

月五年五十和昭

論叢

維新前後の開化思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

限界生産力説と勢力の問題……………文學博士 高田保馬

時論

非常時局下に於ける日支の態勢……………經濟學博士 石川興二

研究

販路説の過剩投資説への發展……………經濟學士 青山秀夫

理想型の理論……………經濟學士 出口勇藏

アウグスチヌスの共同體思想……………經濟學士 澤崎堅造

說苑

蒙疆の人口と農業……………經濟學士 菊田太郎

國民經濟的概念と經營經濟的概念……………經濟學士 尾上忠雄

支那に於ける理想郷思想……………經濟學士 穗積文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

理想型の理論

出口 勇 藏

一 緒 言

さきに規定されるところがあつた方法論史の研究の意義に従つて今や吾々の行ふべきことがらは、理想型の理論が一般に如何なる方法的意識に基いてゐるかを検討することにある。吾々は近世の科學の特色を概説することから始めよう。この自明と考へられ常識に化してゐるところのものを改めて反省することが現代の科學のために必要なのであるから。凡そ經驗科學としての文化科學の認識の課題は、ウェーバーによれば、「經驗的實在の思维的整序」と云ふことであり、その目標は「實在をその文化意義および因果聯關に於いて認識すること」である。¹⁾かかる課題を擔ひ此目標を目指して認識を遂げる文化科學はそれの個有の先驗的、前提に立つてゐる。この先驗的前提を明かにすることによつて、この科學の認識の構造は把へられるであらう。だから吾々は問題をここから展開して理想型の理論に潛入しよう。さて、すべて認識の構造は認識對象と認識主觀とが對立してそれらの間に認識的交渉が營まれると云ふ形態を取る。文化科學に於いては此構造が如何にして可能なのであらうか。ウェーバーに従つて吾々は先づこの間に答へなければならぬ。

* 拙稿「マックス・ウェーバーと十九世紀の方法的意識」(本誌前號所載)の一を参照。

1) Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre (以下に於いては WL.) S. 150, S. 174 (邦譯「社會科學方法論」一岩波文庫版—p. 16, p. 47)

二 認識對象と認識主觀

經驗的實在あるひは客體は人間の實踐的行動によつて外界に創りあらはされたる文化現象の總體である。ところでウェーバーによれば、『文化』とは歴史的であつて、「世界生起の意味のない無限 (die sinnlose Unerendlichkeit des Weltgeschehens) のなかから人間の立場からして意味と意義 (Sinn und Bedeutung) とを以て考慮された有限なる一片」である。²⁾と云ふことは文化は常に或「問題の定立」を提供してゐて、それに向つて吾々が關心を持つと云ふことである。之はウェーバーに於ける文化の概念として豫め記憶さるべきである。このやうに文化が理解せられると云ふことは、科學の對象が客體それ自體であるのではなく、却つて人間の立場からして提起された問題について「意味と意義」とを以てつくられねばならぬと云ふことを意味してゐる。此對象の構成を可能ならしめるものが「文化價值」に他ならない。而も文化價值一般ではなくして特殊な一つの文化價值でなくてはならぬ。即ち經濟學の對象は經濟價值と云ふ價值理念 (Wertidee) に基く經濟的文化意義の價值觀點からそれに關はりをもつものとして實在から抽出することによつて成り立つ。而してその文化意義との關はりの程度に應じて、吾々はかく抽出されたものを「經濟的現象」「經濟に關係ある現象」「經濟に制約された現象」と名づけるのである。⁴⁾

かく形式的に規定された認識の對象の内容について見るならば、それが例へば經濟價值に關はりを持つ人間の行爲によつて歴史的實在の世界に生み出されたものとして、アトムならぬ個性的現象の豐富なる總體であることが、第一に氣付かれる。「世界生起の意味のない無限」のなかから抽出された「一斷片」であつても、それは個性

2) WL. S. 180. (同書 p. 58.)
3) WL. SS. 206, 207 (同書 pp. 96-98)
4) GW. SS. 162, 163 (同書 pp. 32-34)

的具體的な事象の集積である。第二にそれは時間的・空間的な制約に於いてある現象の總體である。認識の對象は或時代に屬し或場所に生起して或文化問題に關はつてゐると云ふ性格を脱することができない。この對象の個性・時間性・空間性・問題性は歴史主義の眞理から生ずる當然の歸結である。

認識の主觀は上に規定された對象に對應して生ずる。或はむしろ自ら對象を規定し對象が規定されると共に自らを確立するといつてよい。最も具體的な認識の主體はそれが經驗的實在の中に生み出され之と實踐的交渉を遂げつゝある姿に於いて把へられなければならぬであらう。行爲的・認識的な主體が眞の認識の主觀たるべきであらう。併しウェーバーが據り所とした西南學派の認識論に基く科學の概念ではかかる主觀を考へない。行爲の主體は單に認識を遂げるものではなく、情感し意慾するところのものであるから、以て認識の主觀とすることはできないと云はれる。却つて、文化科學の規定に與つたと等しい原理が主觀の規定に作用しなければならぬ、即ち對象が文化意義によつて抽出されたと恰も等しく、主觀は行爲の主體から、認識作用即ち眞理價值 (Wahrheitswert) を追求する認識の作用を營む限りのものとして抽出され構成されなくてはならぬと云はれる。實踐的關心を持つ主體は認識關心 (Erkenntnisinteresse) をのみ所有する主觀に轉ぜしめられねばならないのである。之は經驗科學の先驗的前提である。そこで經濟學の認識の主觀は、先に規定された經驗的實在の「一斷片」に向つて認識的に交渉する。而して經濟的文化を評價したりそれについて何等かの意慾を懷いたり將又その意慾を實現したりする者ではあつてはならなくなつて来る。即ち實踐的活動と無縁のものでなければならなくなつて来る。この區別いな峻別は「學問的自制の最初の義務であるとともに、偽瞞を防止する唯一の手段」ともして主觀に要請さ

れる。此要請をウェーバーに可能にする理論がリッケルトの「理論的價值關係」と「實踐的評價」との區別であることは斷るまでもないであらう。かくして認識の主觀は「意慾する人間」ではなくして「思惟する研究者」でありまたさうでなければならぬ。さらに主觀に對しては、或世界觀の所有者であつてはならぬと云ふ要請が伴つて来る。何故なら、世界觀は「決して進歩しゆく經驗的知識の產物ではありえず」「吾々を最も力強く動かすところのどんな最高の理想と雖も、恒に他の理想——他の人々にとつては吾々の理想が吾々にとつて神聖であるやうに彼等の理想が神聖なのであるから——との闘争に於いて實現される」ものであるからして、かかるものの經驗科學への介入は客觀的認識の否定に導かざるを得なくなるからである。主觀の此規定に於いて「沒價值性」の要求が作用してゐることを、吾々は先に研究した。⁶⁾吾々は此作用を「沒價值性理論」の形式的或は第一次的作用と呼びたいと思ふ。而して此理論の實質的内容は理想型の理論を俟つてのちに與へられるのである。

かく形式的に規定される認識の主觀は、認識の對象について云はれると等しく、實質的には個別性・歴史性・空間性・問題性の屬性を有たなくてはならぬ。それは歴史的なる、或文化問題に關心をもち、或民族に屬する、或階級の、或職業に従事する、或個人でしかないであらう。従つてその認識關心はこの事情に應じて或特異なる價值觀點 (Wertgesichtspunkt) に於いて行はれるのでなければならぬであらう。これ認識の主觀の主觀たる所以である。けれども主觀は以上の屬性を有しながらも實質的に一樣なる認識關心を所有するものとして更に限定されなくてはならぬ。自然科學に於いてのやうに意識一般としてそれは規定しえられない。しからば如何にしてそれは可能であるのか。此限定はウェーバーによれば主觀が文化人の主觀であるとされることによつて可能である。

6) WL. S. 154 (同書 p. 22)

7) 拙稿「沒價值性理論の成立」(本誌昭和十四年七月號)参照。

何故なら、「一切の文化科學の先驗的前提は、吾々が一定のあるひは一般になにか或『文化』をば價值ありと認める」と云ふことでは決してないのであつて、むしろ吾々が意識的に世界に對して態度をとり且つこれに或意味を與へる能力と意志とを具へた文化人である、と云ふことである」⁸⁾から。此限定は極めて重要である。歴史的社會的に個別者である主觀はかくして一般化される。即ち文化の或價值理念に基く價值觀點が時代と共に變化し場所の異なるに應じて特殊のたらざるを得ない中にあつて、文化人の——更に明瞭に云ふならば近世ヨーロッパ人の——價值觀點は、近世ヨーロッパの文化情況、それによつて提出される「文化問題」の一様性によつて、自づと一樣化されて来る。實質的に之を云へば、例へば社會經濟學の認識の主觀は歴史的に與へられた既成態としての資本主義あるひは貨幣經濟の文化意義に對して一樣の認識關心を有するものと規定せられるのである。⁹⁾かく主觀が實質的に規定されることは、また對象の規定にも特質を與へずにはおかないであらう。だがこれは吾々の後に取扱ふべき問題である。ここでは唯々主觀が文化人の、實踐的關心を去りまた世界觀から遊離したところの、認識關心として規定されてゐることを述べるだけで満足しなければならない。

認識の對象と主觀とは一般に以上のやうに規定されることが出来る。而してウェーバーが或所で文化科學を「主觀的科學」と名づけるのは、¹⁰⁾以上の先驗的諸前提に由つてである。

三 因果認識

認識の對象と主觀とが交渉するところ、そこに科學的認識は遂げられる。科學的認識に對して掲げられる要請

8) WL. S. 180 (同書 p. 59)

9) Vgl. WL. S. 174, 176 (同書 p. 49, p. 51)

10) WL. S. 71.

は云ふまでもなくそれが眞理價値の實現として客觀的妥當性を有すると云ふことである。對象についての科學的立言は「眞理を欲するすべての人（即ち先に規定せられた文化人——出口）に妥當することを欲してゐる」¹¹⁾ものでなければならぬ。それは支那人に對しても、その人が文化人である限りに於いては妥當でなければならぬ。しかば此要請は如何にして實現されるのであるか。ウェーバーに従へば、文化科學の認識は自然科學と全く等しい意味に於いて因果認識である。¹³⁾とすれば、このものの構造を見分けることによつて、吾々の疑問を解く手懸りは與へられるはずである。

差當つて因果性の範疇一般の意味をウェーバーに問ふならば次の解答が與へられてゐる。「因果性の範疇の充分な云はゞ『本源的なる』意味は二種の思想を含んでゐる。即ち一方ではそれは交互に質的に異つた諸現象の間の、ある云はゞ力學的な紐帶としての『作用』(Wirken)と云ふ思想を、他方では『それらの現象が』『規則』(Regeln)に結びついてゐると云ふ思想を、含んでゐる」¹⁴⁾二つの思想に若干の説明を附加するならば次のやうになる。『作用』とは「運動の時間的繼起の規則 (Regel zeitlichen Aufeinanderfolgens von Bewegungen) と云ふ意味のみを、而かもその規則が本質上永久に等しいもののメタモルフォーゼの表現として見做されると云ふ意味だけに於ける規則の意味」¹⁵⁾を持つてゐる。『規則』とは或作用が絶對的に一度だけしか起らなかったと云ふのではなくして、「あらゆる時間の極微量に於ける端的に『新しいもの』が『過ぎ去つて了つたもの』から正にかくかくにしてそれ以外の仕方にはなく成立せねばならなかった」と云ふ意味での『作用を受けたと云ふこと』(Bewirktwerden)を、云ひかへれば「その新しいものはその時間の極微量に於ける『今』のなかでは絶對的な唯一性に於いて、而かも連續的な生起に於いて『成立した』と云ふ事實」¹⁶⁾を指示してゐる。その場合時間的繼起に於いて先立つものが原因と呼ばれ、後繼する現象が結果と名づけられることは云ふまでもないであらう。

ところで此範疇は文化科學に於いては如何に適用されるのであるか。此問も亦文化科學の認識の對象と主觀との特質から明かにされるのでなければならぬ。文化科學の對象は、既に見たやうに、個性的なる現象の世界である。何がゆゑに個性的現象の

11) WL. S. 184 (同書 p. 64)
12) WL. SS. 155, 156 (同書 pp. 23, 24)
13) WL. S. 181 (同書 p. 61)
14) WL. SS. 134, 135.
15) 16) ebenda.

世界であるのかと云へば、対象界が人間の行爲によつて生起したのから成り立つと云ふ事情からと答へらるべきである。文化科學の対象界は自然科學のそれと異つて、人間の文化創造の意志が自然の客觀的法則と協力してあるひはそれを支配することによつて自らを自然界に喰ひこませつゝ形成した世界、人間の自由なる意志によつて作られたる世界でなければならぬ。この事態は「歴史主義」の人々から強く主張されたのである。^(註)ところで、このことは、因果性が文化科學的認識に對しては適用されえないと云ふことを示してゐるのではないであらうか。何故となれば、文化科學の対象の特色をそれが人間の意志の自由の象徴としての非計算可能性 (Unberechenbarkeit) —— 之は因果認識が禁ぜられてゐると云ふ意味である —— と云ふ意味に於いて「非合理性」と名づけるならば、この非合理性こそ文化科學に特有のものでなくてはならない。この非合理性は因果聯關とは逆の聯關、目的論的聯關が人間の行爲の構造聯關のなかに這入り込むことによつて成立するものに他ならない。とすれば文化科學に於いて因果認識を行ふことは対象の性質から云つて不可能であり、また許さるべきことではないのではないか。このやうに思はれもしよう。^(註)しかしながらウェーバーは、文化科學の対象界に見られるところの、歴史主義の人々によつて主張された事態を肯定すると同様に強く、上の疑惑を否定的に解決した。彼によれば対象界に人間の目的論的聯關が這入り込んでゐると云ふことは、因果的認識をば阻むものではないのである。何となれば、人間の行爲が目的と手段との範疇に結びついてゐるとするならば、その行爲は經驗によつて得られた法則的知識 (nomologisches Wissen) に基いて、目的表象をば結果として齎すやうな原因をば手段とすることによつてその目的を實現するに他ならないからである。「目的」とは「ウェーバーは書いてゐる、「吾々の考察によつては或結果の表象で或行爲の原因、となるところのもの (Vorstellung eines Erfolges, welche Ursache einer Handlung wird) である」¹⁷⁾と。又彼は次のやうにも書いてゐる。「目的」と「手段」の範疇と云ふものは——これなくしては目的論的『思惟』一般は存在しないのであるが——これを用ひて科學的に操作が行はれるや否や、思想的に作られたる法則的知識 (nomologisches Wissen) を、即ち従つて因果性の範疇を用ひて展開されたる概念や法則を含んでゐる。何となれば目的論のない因果的結合と云ふものは確かに存在するけれども、因果法則 (Kausalgesetz) のない目的論的概念と云ふものは存在しないからである」¹⁸⁾それゆゑに目的的聯關が因果的聯關を豫想するものである限りに於て——ウェーバーの目的論に關する吾々の吟味は後のために保留されねばならない——行爲の世界にも亦因果聯關が經驗法則として働いてゐると云はなければならず、その限りに於いて文化科學に因果性の範疇を適用しえないとの疑惑は一掃されなくてはならないのである。成程人間の行爲に對して因果的認識が充分に行はれないことはあらう。けれどもかく云へば自然現象に就いても同様である。自然現象といへども、「具體的な個別現象の説明を

17) WL. S. 183 (同書 p. 63)

18) WL. SS. 85, 86.

欲する」場合には、徹底的に因果的に把へることができぬ場合が多いであらう。^(註二)にも拘らず吾々はかゝる理由で以て自然科学の因果法則の妥當性を疑ひはしない。「歴史に關係ある人間の行爲を因果的に遇及する機會」は上記の因果聯關と同様に複雑であり、個性的であり、一層多くの要素を含むだけのことであつて、本質的に兩者の間に差異は存在しないのである。¹⁹⁾

(註一) 例へばクニースは書いてある、「人間の歴史的生命的の考察と評價とが行はれる場合には、一方では自由の結果として現れる發展契機と他方では必然の結果として現れる發展契機との對立が從つてまたその協働が示されてゐる」と。而して彼は前者を realer Faktor 後者を personaler Faktor と名づけてゐる。尙、人間の行爲は自然法則を “leiten und lenken” しようゐると云はれてゐる。(Vgl. K. Kries: Die politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte (1883) S. 351, S. 356)

(註二) 尤もこの疑惑は歴史の理論家達から提出されたものであつて、クニースはこの問題について「或經濟現象の法則性は、もしもその要素すなはち real な要素と personal な要素とがその現象の本質に於いて作用する原因として確められてゐるならば、確證されてゐる。」と書いてゐるのみである。(K. Kries: ibid. S. 477)

(註三) かゝる場合には吾々は現象が吾々の法則定立的知識と直接に矛盾するものを含んでゐないと云ふことで満足する。その理由は、それが永久に吾々の知りえないためであるか、或はそれ以上に、吾々の知識慾をそゝらないかのためである。(W.L. S. 66)

だが此等の科學に於いて因果認識が異なるのは次の二つの點に於いてである。

(一) 吾々の因果的要求は文化科學に於いては、自然科学に於けると質的に異つた満足を見いだすことができる。自然科学は現象を一般法則の下に把へることを意圖するのであつて、それぞれの個別現象の「計算可能性」は敢へて問はれることを要しない。²⁰⁾ところが人事現象を解釋する場合には、その解釋が「單に吾々の法則的知識と一致すると云ふ意味に於いて『可能』であるとして『把へ』るにとどまらず、更にその解釋を『理解する』

(Verstehen) といふ、云ひかへれば、『内的に』『追體験できる』具體的な一つの『動機』(Motiv) あるひはかかる動

19) W.L. SS. 64-67.
20) 前段〔註三〕參照。

機の複合物を發見して、この動機に……その解釋を歸屬する (zurechnen) こと²¹⁾が意圖されるのである。即ち現象の解釋は法則を可能にする以上に、さらに具體的個性的なる因果聯關を示すことができる。だから人事現象はそれの解釋が具體的な動機に歸屬せしめられうる限りに於いては、個別的なる自然現象よりも一層非合理的でないものと云はなくてはならない。そこで人間の行爲は、それが適確に因果關係に齎される (adäquat verursachen) こと、云ひかへれば、その人の特定の目的と洞察とそれらによつて規定される合理的なる行爲とを前提する場合に充分に動機づけられる (zureichend motivieren) ことが可能である限り、目的論的に合理的 (teleologisch rational) であると云はねばならない。²²⁾即ち歴史の理論家の主張とは逆に、人事現象は人間の意志がそのなかに這入りこんでゐるがゆゑに即つてそれだけ因果的、計算可能、性に富んでゐるのである。

(二) 人事現象の分析に對する因果的慾望は、人間の行爲が、單に經驗的に考察されたところの、生起の法則 (Regel des Geschehens) ——それがいかに嚴密であらうとも——に關係せしめられると云ふことだけで満足するものではない。吾々はその行爲の意味を了解することを願ふのである。ここに意味 (Sin) とは廣く行爲者によつて主觀的に思念された (subjektiv gemeint) ところのものであつて、客觀的に正しい (richtig) とか形而上學的に基礎づけられて真理で (wahr) あるとか云ふ意味ではない。²³⁾文化科學の認識は畢竟この意味の了解——Sinndeutungである。ところで意味了解は行爲が經驗的統計的に證明されるにとどまらず、更に進んで認識の主觀がその行爲を追形成 (nachbilden) するところに成り立つ。ウェーバーによれば、このことは——先の引用句が既に示してゐるやうに——その行爲を喚起した動機が主觀によつて追形成されること、云ひかへれば認識の主觀がその行爲を *hinter-*

21) WL. S. 67.
22) WL. SS. 67-69.
23) WL. S. 503.

ivierenすることによつて可能である。かくして意味了解は主觀の動機づけ (Motivation) に他ならない。²⁴⁾ ことからして了解の主觀の性格が明瞭となる。²⁵⁾ しかしながら了解がこのやうに主觀の性格を有つがゆゑにこそ、認識には明證 (Evidenz) が與へられるのであることは注意されなくてはならない。ここに明證とは「意識現象の内的直觀性」即ち主觀の意識に於ける直觀的明確さのことである。²⁶⁾

文化科學に於ける因果認識とは上述の如き内容を有つ。認識に於ける主觀の經驗的な追形成と云ふ點に於いてそれは著しい特色を持つ。然らばこの特色は何に基きた如何にして可能なのであらうか。この事は更に説明されることが必要である。——既に見たやうに文化科學に於いては對象は人間の行爲より成つてゐると云ふことから、而してこの行爲は主觀の經驗的な知識と内面的に聯關を持つてゐると云ふことから、此事態は説明されなければならぬ。人間の行爲は合目的であり、「主觀に思念された意味」の實現が意圖されてゐる。即ち「吾々が具體的に何かを意慾するのは『そのもの自體の價值のため』か若しくは究極に於いて意慾されたものに役立つ手段としてである。」²⁷⁾ ウェーバーの他の表現で云へば、意味をもつた人間の行爲は *wertrational* か *zweckrational* かの何れかである。²⁸⁾ ゆゑにかかる行爲の要素についての知的省察は取敢へず目的と手段との範疇に結びつかなければならぬ。「しかるに先づ疑ひなく科學的(即ち經驗科學的——山口)考察の對象となりうるのは與へられた目的に於ける手段の適用性と云ふ問題である」²⁹⁾ と彼は云ふ。すなはち行爲が經驗科學に於いて取扱はれるのは、それが *zweckrational* である限りに於いてである、と云はれる。何故であるか。それは實にそこに於いてのみ行爲と經驗的知識との内的聯關が横はつてゐるからである。行爲に於ける目的と手段とがそれぞれ經驗的な因果的認識に

24) WL. SS. 69, 70. 25) WL. S. 122.
26) WL. S. 115 Anmerk. Vgl. S. 504.
27) WL. S. 149 (同書 p. 14)
28) Wirtschaft und Gesellschaft S. 12.
29) WL. S. 149 (同書 p. 14) 傍點は出口のもの。

於いて知られてゐる結果と原因とに照應するところに、——目的が「或結果の表象であり或行爲の原因となるところのもの」(前出)であり、手段が行爲の内容であり或原因の表象と合致するところに、經驗的認識は成り立つと云はねばならぬ。主觀の追形成の可能性はここに於いて又ここに於いてのみ開かれてゐる。ゆゑに認識は主觀に知られてゐる因果聯關の經驗的知識を、ウェーバーの言葉で云へば、法則定立的知識 (nomologisches Wissen) あるいは經驗の規則 (Regeln der Erfahrung od. Erfahrungsregeln) をば、對象に就いての存在論的知識 (ontologisches Wissen) の中に挿し入れるところに認識の操作の本質がある。^(註1)之を他面より云ふならば、對象の faktisches Handeln を主觀的に構成された rationales Handeln と對照させ、前者を後者を手懸りとして開明することを意味する。換言すれば認識の操作は先づ對象の目的論的合理化 (teleologische Rationalisierung) から初まるのである。而して此操作の認識上の妥當性はどこで保證されるのであるかと云ふならば、ウェーバーは上の意味に於ける目的意識的なる行爲即ち zweckrational な行爲が經驗的實在に於いて顯著なる實際上の重要性 (eminent faktische Bedeutung) を有してゐるからであると云ふ注目すべき解答を吾々に提供してゐる。³⁰⁾此解答が如何なる意義に於いて承認を得るかと云ふことも亦吾々の後の批判に於いて検討される筈である。ここではとにかくウェーバーの意圖に忠實でなければならぬ。而して若し對象の目的論的合理化に基づいて對象の構造が主觀の經驗的知識によつて充分に開明されたとするならば、その了解は合理的了解 (rationale Deutung) と云はれるのである。^(註1)

(註1) WL. SS. 276-277 法則定立的知識とは「自分自身の生活實踐と他人の行動に關する知識とから創られたる、吾々の法則的な經驗知」であり、存在論的知識とは「資料的に證明でき、歴史的状況に屬するところの或事實に關する知識」の意味

30) WL. SS. 129, 130.

である。ウェーバーがこゝで語つてゐるのは歴史的認識についてである。しかし之は廣く文化科學の認識について云ふことができる。次の節を見よ。

(註二) WL. 129 合理的了解は條件づきの必然性判斷 (bedingtes Notwendigkeitsurteil) の形を取る。即ち圖式的に云へば「與へられた意圖 (Gegebene Absicht) x がある場合に、知られてゐる生起の法則に従つば、行爲者はその意圖を實現するためには y と云ふ手段を即ち y' と云ふ手段の一つを選ばねばならなかつた」と云ふ形を。

なほ文化科學の認識の主觀に對して豫め前提せられ、その作用に基いて認識が遂げられるところの此經驗的知識は、實は先に先驗的に規定されたところの認識の主觀に於いて、即ち文化人に於いて初めて満たさるべき條件であることを、吾々は後のために注意しておきたい。

四 了解圖式——理想型の構成

上述の因果認識は次の二様の仕方で遂げられる。

「文化科學は現實の状態と變化とを『作用を受けたもの』と『作用するもの』として考察する。而して一方では具體的な諸聯關から抽象に依つて『因果』の『規則』(Regel(der) Verursachung) を發見しようとするし、他方では具體的な『因果』諸聯關をば『規則』に關係させて『説明』(durch Bezugnahme auf Regeln (erklären) しようとする。」³¹⁾

この第一のものが理論的認識であり第二のものが歴史的認識であることは云ふを要しないであらう。前者は現象をそれが大量的に現れる限りに於いて一般的法則的に把へようとし、後者はその因果法則に基いて現象の個性——歴史的個體——を因果的に歸屬することを求める。ところで理論的認識に於いて意圖される法則も歴史的認識に於いてこの法則に基いて遂げられる具體的因果聯關も如何なる意味を持ちまた如何にして可能であるのだ

らうか。この問に向つての解答が文化科學の認識の構造を最終的に開示するものでなくてはならない。

先に見たやうに、文化科學に於ける因果的認識の特色は、文化問題の與へられた狀況に於いて、主觀の經驗的知識・法則定立的知識が對象の存在論的知識に參與するところに成り立つと云ふことであつた。主觀の法則的知識が自らを、理論的認識の場合には一般的法則的な形に於いて、歴史的認識の場合には上の一般的なる形に媒介された個別的な形に於いて、認識の目標——Sindeutungのために對象の同じく一般のおよび個別的なる存在論的知識に對應することが出来るやうに合理的に創り上げること、云ひかへれば主觀の Phantasie によつて經驗的知識から了解圖式 (Deutungsschema) と云ふ一つの思想像 (Gedankenbild) がつくり出されること、これが認識に對する主觀の參與の仕方でなければならなかつた。この參與が一つの思想像である限り、それは飽くまで Fiktion であり Utopie であつて、直ちに對象界に妥當するとは斷じて云ふことができない。にも拘らずこの思想像を以て對象に臨むのでなければ、經驗的に妥當する認識の成立する地盤は喪はれねばならない。主觀の經驗的知識に基いて成立し、經驗的認識のために避けることのできぬ此手段としての思想像がウェーバーの理想型に外ならないのである。而して理想型が先づ以て合理的なる性格を有すべきことは、以上の所論から今や自明のことではなればならない。

尙一つの重要な問題が残されてゐる。理想型は主觀の經驗的知識に基くところの主觀的な構成物である。とすればこのものは主觀の *wirklich* な形成に委ねられてゐると云ふことも一應考へられはしよう。ところが宛もこのものについて對象の客觀的な知識即ち「的確なる因果性」の知識が可能となるやうな客觀性が要求されな

ければならないのである。即ち主觀的起源を有つにも拘らず客觀的な事物または事態を示してゐることが理想型の構成には要求されてゐる。先に述べたところの *Entstehen* を主觀に於いて有する此思想像は、對象について *Geltung* をもつことが要求されるのである。理想型の構成はゆゑに主觀の *Wirkung* にまかされてはならない。而かも此要求は、ウェーバーの立場に従つて、純經驗的にまた論理的に満たされなくてはならない。ここに於いて彼がこの要求を論理的に満たすものとして提出するものが、ヨハネス・V・クリースに依つて論ぜられたところの「客觀的可能性の範疇」(*Kategorie der objektiven Möglichkeit*)であつた。^(註二) クリースに由れば、此範疇は確率計算の原理を援用することによつて經驗的に獲得される。そこでウェーバーに於いても亦、主觀的に構成される理想型が客觀的な内容を包蔵すると云ふ保證が與へられるのは、確率計算との類比に於いて、純經驗的にでしかない主張される。^(註三)

(註一) Johannes v. Kries: *Ueber den Begriff der objektiven Möglichkeit und einige Anwendungen desselben* (1888) 客觀的可能性の意味について、この書物には次の様に書かれてゐる。「正確に規定されてをらない或事情の下で一つの出来事が生起するとして、若しもその出来事をば事實上妥當する生起の法則 (*factual geltende Gesetze des Geschehens*) に従つてひき起すやうな此事情の規定と云ふものが思惟されうらば、その時その出来事の生起は客觀的に可能であると名づけられる。」(*Ibid.* S. 6)

(註二) 確率の客觀性が充分な繰返しによつて經驗的に得られるやうに、理想型的概念構成も亦それを實證するやうな事例を多く求めて經驗的に客觀的可能性を保證する。兩者の間には——例へば一つのサイコロと或歴史的事件との間には、絶對的偶然の有無と起りうる事象の數量が規定されうるか否かとについて、同日に論じがたきものを有つてゐる。にも拘らず、吾々は此論理的操作を實際行つてゐるのである。なほ兩者は確實性の度合を許す點に於いても同一である。(W.L. SS. 282-286)

五 理想型的認識

理想型の構成の手續きは以上に於いて明かになつた。吾々は、今一度この思想像の認識に對する意義を省み、³²⁾吾々が經驗科學に於いて主觀的に合理的な「非現實的な因果聯關」を構成する目的は「現實的な因果聯關を透察すること」であり、³²⁾「經驗的な現實をそれと比較しそれとの現實の對照なり現實のそれからの距離なり現實とそれとの相對的な近かよりなりを確かめ、かくして現實をば、できるだけ一義的に了解される概念で以て敘述し、因果的に歸屬せしめつづ了解しまた説明しうる」と云ふことである。³³⁾かかる意味に於いて文化科學の認識は理想型的認識であり理想型は認識の手段である。然らばこのことから理想型には如何なる屬性があると考へられねばならないか。それには如何なる種類があるのであるか。従つて又理想型的認識の特徴は何處にあるであらうか。

理想型概念の屬性——第一に理想型はイデーではない。存在すべきものではない。このことは、理想型が上述の經驗科學の先驗的前提に基いて認識の主觀が論理的に構成するところの思想像であると云ふことからの當然の歸結であつて、若しもそれがイデーであることを要求するならばそれは自然主義的一元論から生ずる妄想であつて、經驗科學に於ける存在理由を喪失しなければならぬ。³⁴⁾第二に理想型は類概念ではない。何となれば、その構成文化現象の類的普遍性を求めてはなく、その特性を了解することを目指して行はれるからである。³⁵⁾第三に、かと云つて理想型は文化現象の本質を示す概念でもない。それは飽くまで或文化問題のもつ文化意義によつて抽出されたところの非現實的な主觀の構成物であつて、それで以て歴史的實在の本來の内容や本質が固定されたとか、歴史のなかで實現される現實の力がそこに「實體化」されてゐるとか考へるのは、之また自然主義的偏見より出づる誤解でなければならぬ。³⁶⁾その妥當性には常に限界が伴つてゐる。第四に、従つて、それは歴史主義の正しい主張に服して歴史的性格を有しなければならぬ。それは常に何時かは滅びゆくものである。³⁷⁾けれどもこのことは歴史的相對主義に陷ることを意味しない。それは歴史的ではありながら經驗の規則に於いて確乎たる地盤を持つて構成され、それ自身の内に完結性をもつてゐる。³⁸⁾

32) WL. S. 287.

34) WL. SS. 199, 200.

35) WL. S. 202 (同書 pp. 90, 91)

36) WL. S. 195 (同書 p. 80)

37) WL. S. 206 (同書 p. 96)

33) WL. SS. 497, 498.

理想型の種類——理想型は先づ第一に認識關心が一般性に向ふか個別性に關はるかによつて、即ち理論的關心と歴史的關心との差別に應じて、一般的性格をもつものと個別的な性格をもつものとに分けられる。例へば抽象的國民經濟學に於ける「交換經濟」とか「法則」とかは前者の、「フリードリッヒ・ウィルヘルム四世の政治」は後者の實例である。理想型は上述の通り類概念ではない。けれども類的な理想型と云ふものは存在する。一般的性格をもつ理論的理想型がそれである。第二に理想型はその對象が思想であるか社會現象であるかによつて思想的理想型と事物の思想型とに區別することが出来る。唯物史觀や資本主義の精神は前者に、資本主義經濟や都市經濟は後者に屬してゐる。第三に吾々は今一つの種類を——發展的理想型を擧げなくてはならぬ。こゝにはウェーバー自身が書いてゐる發展的理想型の一つを示しておきたい。彼は『古代の農業狀態』あるひはむしろ古代經濟史に於いて都市的發展を遂げた古代諸民族については或「組織段階」が繰返へされたものと明瞭に認識できると書いてゐる。即ちそれによれば、古代民族は第一に農業共同體 (Bauerngemeinschaften) 第二に城廓王國 (Burgenkönigum) 第三に貴族ポリス (Adelspolis) 第四に官僚的都市王國 (Bureaucratisches Stadtkönigum) 第五に權威的僑役國家 (Autoritärer Lehnungsstaat) 第六に重甲兵ポリス (Hoplitenpolis) 第七に民主主義的市民ポリス (Demokratisches Bürgerpolis) ——かゝる發展段階を經過して都市國家を崩壊せしめたと云はれてゐる。尚、こゝでウェーバーが構成したこの發展的理想型は、古代經濟史が政治史と離すべからざる關係にあると云ふ事情に基いて、「軍事の全權を完全に委任する人々」(rein militärische Konstitutionen) を標準としてつくられたものであること、彼自らの語るところであることを注意しておくべきであらう。³⁸⁾

理想型の種類は、認識關心より生ずる第一のものとして對象より生ずる上の三つの區別とがそれぞれ結びつくことによつて、合せて六つの種類を生ぜしめる。³⁹⁾

理想型的認識の特質——理想型的認識は、理想型の上述の諸屬性から明かであるやうに、經驗的妥當性を有たない。歴史的認識であれ、理論的認識であれ對象は理想型を用ひて「的確なる因果聯關」に於いて認識されるとは云へ、その因果聯關が或文化價値の觀點に關つてゐる限り、即ち限定された問題から生ずる限定された認識關心の下に認識されたものであるかぎり、而して又、主觀的經驗的知識に基いて對象に臨み限り、對象そのものの本質に迫りえたことと云ふ保證は與へられてゐないからである。これは認識が未熟であるために起るのではない。寧ろ自然主義的偏見によつて認識が直ちに對象の本質を顯はにし經驗的妥當性を有すると云ふ考へが誤謬を氣付かしめられて、經驗的妥當性をもたぬ理想型的認識が自覺され來たことが、正に科學の成熟を意味してゐる。⁴⁰⁾ それのみではない。理想型が認識に對する論理的役割をはたすのは、却つて「正に自己みづからの非現實性を表

38) WL. SS. 208, 209 (同書 pp. 99, 100)

39) WL. S. 130.

40) WL. SS. 201, 202 (同書 pp. 88-90)

41) Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte SS. 35-42.

42) ibid. S. 34, S. 44.

明することによつて」である。云はなければならぬ。ウェーバーが經驗法則と合理的理想型を對照して前者を empirische Leitende Regel mit problematischer Deutung と云ひ、後者を Deutung mit problematischer empirischer Geltung と名づける所以は、こゝに明瞭となるであらう。従つて又、理想型的認識に於ける「法則」の有する特異なる意義が了解せらるべきである。「法則」は自然科學に於けると異なり認識の目的ではなくして手段であり、『一般的』即ち抽象的であればあるほど……その効用は小さいのである。⁴³⁾「發展の理想型が直ちに歴史の發展過程そのものを表現してはゐないと云ふ重要な主張も、今や吾々に取つては繰返されるを要しない明白な事態でなければならぬであらう。⁴⁴⁾

(註) しからば理想型の認識に對する効用とは何であるか。ウェーバーの論述によつて之に對する解答を整理するならば、次の四種の効用が指示されてゐるのを見いだすであらう。——(一)術語的 (terminologisch) (二)分類的 (klassifikatorisch) (三)體系的 (systematisch) (四)索出的 (heuristisch) 價值。Vgl. B. Pfister: Die Entwicklung zum Idealtypus (1928) S. 167 以下には各々について詳細に Stelle が示されてゐる。

社會科學の認識はかかる理想型的認識としてのみ客觀的妥當性を持つ。しからばこの科學の歴史は如何に把握されるのであるか。又この科學に於ける進歩とは一體いかなる事態を指すのであらうか。吾々はおのづとこの疑問を懷かせられる。けれども此疑問は理想型の有する上述の歴史的 성격より解かれるはずである。即ち常に或文化問題を持ち或特定の觀點の上で構成された理想型——「その時々の吾々の知識狀態と吾々がその時々に使用する概念的形體」⁴⁵⁾——を用ひて現實の混沌たる一斷片即ち或文化に秩序を與へようとする或思想體系は、新しい文化問題を擔つた新しい觀點に立つ認識關心によつて批判を受ける。その批判は先の體系の「概念構成の批判」と云ふ形を取るであらう。而して新しい觀點に立つ認識は新しい理想型的認識にまで成熟するであらう。

「だから社會生活を取扱ふ科學の歴史は、いつでも、概念構成によつて事實を思想的に整序しようとする企て——かくして獲られた思想像の、科學的視野の擴大および移行による解消——而してかく變化した基礎の上での概念の新構成——この絶えざる交替に他ならないのである。」⁴⁶⁾

43) WL. S. 206 (同書 p. 96)
 44) WL. S. 203 (同書 p. 92)
 45) WL. S. 130.
 46) WL. S. 178 (同書 p. 56)
 47) WL. S. 203 (同書 p. 92)

従つて此科學に於ける進歩も亦、新しい「大なる文化問題の光明が點ぜられ」而して科學がその立場と概念裝置とを代へて事實に向ふ時に達せられるであらう。⁵⁰⁾理想型的認識が歴史學派一般について難ぜられるところの認識の相對主義と一應は鋭く對立するものであることが、ここで承認せられねばならぬ。此認識は歴史的性格を持ちながら而かも常に鋭く論理的に構成された思想像の中で遂げられる以上、常に完結性を有してゐる。それは同一の概念體系の内部で認識内容の増加によつていつかは完結した思想體系にまで高められようと考へる相對主義ではない。而して此相異は實在模寫說と批判主義との認識論上の立場の自覺の相異に基くものである。⁵¹⁾

さて吾々は理想型の理論の特質を略々書き終へたかと思ふ。最後に残つた問題は此理論による歴史・理論・政策の三部門の認識の構造聯關を見究めることでなければならぬ。歴史認識と理論認識とが對象の具體的聯關から個別性と一般性とに沒價值的に着目するところに分化することは、既に先に示された。ところで政策的認識は——之も亦經驗科學としては沒價值的にのみ理想型的にのみ存立しうる。⁵²⁾先に沒價值性理論の第一次的作用として述べた先驗的前提はここで内容的に限定されて經驗科學の内に這入つて來る。ウェーバーの方法論はかくして沒價值性理論と理想型理論との相互補完的な作用に基いて三つの認識部門の構造聯關を特異なる形態に於いて可能にしてゐるのである。而かもこの構造聯關を根柢より支へてゐる契機が此科學の先驗的前提——認識主觀に對する實踐性の喪失と世界觀からの自由の要請に他ならなかつたことは今や明かであらう。自然主義に於ける三部門の統一が實踐的な認識主觀の自覺によつて遂げられてゐたのに對して、ここではその同じ統一が主觀に對して要請せられる實踐性の喪失に基いて特異な形態に於いて可能になつてゐるのである。三つの認識部門に統一を與へるものが實に認識の主觀の自覺・方法的意識に他ならないのであることを了解させる此事態に對して、吾々は深く注目するところがなくてはならない。

48) WL. S. 207 (同書 p. 97)

49) ebenda (同書 同頁)

50) WL. S. 214 (同書 p. 108)

51) WL. SS. 208, 209 (同書 pp. 98, 99) Vgl. SS. 171, 172 (同書 p. 46)

52) 詳しくは拙稿「沒價值性理論の成立」にゆづる。